OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 近代の商家における書画コレクションの形成と活用 ：近江日野の事例より |
| Author(s) | 多田羅, 多起子 |
| Citation | デザイン理論. 2026, 87, p. 82-83 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/103724 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 近代の商家における書画コレクションの形成と活用
## ── 近江日野の事例より

多田羅　多起子　広島大学

### はじめに

床の間の掛軸や，広間での屏風といった形式は，美術作品として鑑賞されるだけではなく，暮らしを彩る調度としての役割を強くもっている。本発表では，近江日野（現：滋賀県蒲生郡日野町）のある商家に伝わる所蔵品目録『家蔵書画現在品図鑑』（以下，『書画図鑑』とする）を手掛かりに，近代の商家において暮らしのなかで求められていた美術品の実態を明らかにし，その役割や価値を考察することを目的とする。『書画図鑑』には，江戸時代後期から昭和戦前期を中心に形成された 300 点を超えるコレクションに関する記録が収載される。書画の内容や所蔵経緯等の情報が書き込まれ，管理者が描いた縮図が多数含まれる点に大きな特徴がある。熱意ある管理者による詳細な記録によって，近代の商家における書画受容の様相を具体的に立ち上がらせることができる資料と位置づけられる。

### 先行研究

商家のコレクションに関する研究は，美術館，博物館への寄贈品を特集した展覧会を中心に，これまでにも多くの例があり，美しい屏風や掛軸の名品，茶道具，上質な漆器，陶磁器などが紹介されてきた。先行研究で指摘される通り，商家にとって，これら所蔵品や所蔵品をしつらえる座敷や茶室は必要不可欠であり，家業や親戚とのつきあいに必須の装置であった（永島明子「廣海家の蔵が伝えたもの」『豪商の蔵 ── 美しい暮らしの遺産 ── 』京都国立博物館，2018 年）。客人をもてなすことは商家の業務の一部でもあり，かつ主人の趣味の発露でもあったと言える。

日野と画人たちの関係，および，近江商人が美術文化に果たした役割については，國賀由美子氏による一連の先行研究で詳しく論じられている（國賀由美子「島崎家伝来「書画帖」について」笠井昌昭編『文化史学の挑戦』，思文閣出版，2005 年，他）。國賀氏によって，日野には京都や伊勢との地域的な結びつきから文化的ネットワークが形成されており，画人の活動をバックアップする財力と理解があったことが指摘されている。

また，『書画図鑑』が記録する幕末から昭和戦前期にわたる期間は，暮らしと書画の関係が大きく変化したことが各方面から指摘されている。先行研究が指摘する近代的な諸動向と照合すれば，『書画図鑑』からうかがわれる暮らしと書画の関係は，階層，書画の内容，入手の仕方，主体となる担い手のいずれにおいても近世的様相を留めるものと見なすことができる。

### 資料概要と編集の視点

『書画図鑑』は，表紙の縦 24.4cm 横 16.2cm，厚み 4cm の冊子であり，二つ折りされた料紙 166 丁が綴じられている。内容は大きく屏風と掛軸にわかれ，掛軸は画と書に，書はさらに筆者の属性によって分類されて，合計 335 点が収録される。

本資料の編集は昭和 21 年（1946）で，表紙の文言から，記録者は管理者でもある当時の当主であることがわかる。入手の経緯に関する記録は大半が 19 世紀後半（幕末から明治中期）であるこ

とから，『書画図鑑』記録者の先代による記録が別にあり，それに基づいて記録者が編纂，追記したものと見られる。題箋に記された「後代参考ノ為ニ残置ク」の文言から，将来的な家内でのコレクション管理のため作成されたことがわかる。

記載された項目は，整理番号，筆者，画題，使用目的／時期，材質，表具寸法，表具使用，収蔵経緯や参考文献などの注記，そして表具裂を含む図様である。現在の美術館・博物館の調書に近いが，使用目的／時期が朱字で書き入れられ重視されている点に大きな特徴がある。また，いくつかの図には，画家の様式的特徴を再現しようと試みた形跡があり，所蔵品の管理に必要な情報という範囲を超えた画への関心が窺われる。

屏風の頁には，慶祝や祭礼，仏事，不幸などの用途と，上中下の格付けが朱字で書き入れられている。行事の重要性や性質と画題，格付けの組み合わせを勘案し，必要な時に必要な屏風を選択して立て回し，行事を演出していたことがわかる。

掛軸については，家にとって特に重要な品についての注記が目をひく。また，商家の大床にふさわしい大幅や三幅対が重宝されていることがわかる。注記によって，元は対幅や三幅対でなかった掛軸が関連する軸と組み合わせられ，対となるように表装された例も確認され，当主が持っていたキュレーションの意識を読み取ることができる。

以上のように，本資料の編集の視点の特徴として，TPO に応じて屏風を立て掛軸を掛けるために必要な情報を重視していること，記録者が書画にもつ並々ならぬ愛好心を指摘することができる。

## 書画コレクションの特徴

続いて，収録作品をリスト化し，分析した結果をみていきたい。画題のジャンルを集計すると，花鳥画（38%），山水画（32%），人物（17%），その他の順となる。季節感を演出しやすい花鳥画や，反対に，掛ける季節や接客相手の属性を問わない山水画が，接客空間に適した題材として活用されたことがわかる。

収録画家を集計すると，コレクションの中心には日野，京都，津藩と関わりの深い画家や文人が位置し，江戸後期から明治期にかけての作品が多数を占めていることがわかる。最も掲載数の多い塩川文麟は，幕末の動乱を避けて日野に滞在していた時期がある。『書画図鑑』には，滞在中に直接依頼を受けた制作のほか，文麟が京都に戻った後にも屏風講が行われていた記録があり，地域にとって重要な画家であり続けたことがわかる。また，先行研究での國賀氏の指摘通り，京都の画家や文人たちと強い結びつきがあったことが，掲載数の多さからわかる。加えて，女性画家の作品が一定数収録されているのが目を引く。先行研究で指摘されるような 19 世紀における女性画家の活動の活発化を反映していると言える（仲町啓子編『江戸時代の女性画家』，中央公論美術出版，2023 年）。

## おわりに

今回行った『書画図鑑』についての分析は，先行研究の指摘を具体的な作例や受容のあり方と結びつけて補完するものと位置づけられる。

書画と共にある暮らしについて，近世における将軍家や大名家のコレクション，あるいは近代における新興富裕層のコレクションについては先行研究の蓄積がある。しかし，年中行事や日常的な接客空間で用いられる書画コレクションについては，具体的な様相を捉え難い。そのような状況において，書画への関心が高い記録者による本資料は，近世的な書画受容の在り方を細緻に伝える貴重な記録である。本資料が示すのは，個別の作品に関する美術史的価値だけではない，まとまった資料群としての価値である。商家における書画コレクションの価値は，当主の趣味だけではなく，商いの地と結びついたネットワークから紡がれている。『書画図鑑』に記録されたのは，その場に必要とされたという暮らしのデザインの記憶でもあると言えるだろう。